

芥川龍之介全集逸文

浦 西 和 彦

宇野浩二の文学的回想「文学の三十年」によると、菊池寛が宇野浩二の小説「蔵の中」を、「東京日日新聞」の文芸時評で「大阪落語のやうである」と評したという。この菊池寛の洒落た批評はいつ出たのか、勝山功編「宇野浩二参考文献」（『日本近代文学大系第40巻』昭和45年7月10日発行、角川書店）にも、また、渋川驥編「宇野浩二参考文献」（『増補改訂版日本現代文学全集第58巻』昭和55年5月26日発行、講談社）にも、菊池寛のその文献名は登録されていない。

宇野浩二の「蔵の中」は、大正八年四月一日発行の「文章世界」に発表されたのであるから、菊池寛のその批評は大正八年四月前後の「東京日日新聞」に掲載されたものと、おおよその見当がつく。

事実、菊池寛の批評は、「四月の文壇」と題して、大正八年四月三日の「東京日日新聞」に載っていた。宇野浩二が「大阪落語」と

書いたのとは、微妙に言葉が異っていて、それには「此の題材を扱ふのに、何うして落語か何かのやうな形式を取らなければならないのか」とあった。いま、宇野浩二の作品や菊池寛の批評については、ここでは触れないことにする。

ここに紹介する芥川龍之介全集逸文は、この菊池寛の「蔵の中」批評文を確認することのついでに、大正八年一月から大正九年十二月までの「東京日日新聞」を閲覧した結果、目に止まったものである。それは、次の二点である。

- 一、「九月の文壇を合評す（一）」（八）（『東京日日新聞』大正八年9月4日、5日、7日、8日、9日、11日、12日、13日）
- 二、「新富座劇評（上）（下）」（『東京日日新聞』大正9年6月15日、16日）

前者の「九月の文壇を合評す」は、芥川龍之介が直接にペンをと

って執筆したという作品ではない。いわゆる合評会の記録で、それも、いかにも大正期のおおらかさともいふべきであろうか、合評出席者のうち、どの言葉が誰の発言か、芥川龍之介は勿論、その発言者の名前が記されていない。どの言葉が芥川龍之介の発言か判明しないので、芥川龍之介の逸文としてここにあげるべきではないかもしれない。しかし、「九月の文壇を合評す」の(一)から(八)までのうち、毎回名前が出ているのは、芥川龍之介と菊池寛の二人であり、それだけに芥川龍之介の占める比率は大きいといえようか。どちらにしても、大正文学研究の資料の一つとして面白いと思われるので、ここに紹介する次第である。

後者については、この「新富座劇評」以外に、芥川龍之介は、大正九年に、既に全集に収録されているところの「明治座劇評」(「東京日日新聞」大正9年1月16日)、「市村座劇評」(「東京日日新聞」大正9年10月15日)、「明治座劇評」(「東京日日新聞」大正9年11月13日)の三篇の観劇評を執筆していることを付記しておく。事のついでに書き加えておけば、芥川龍之介には、「菊池寛の小説(中)」(「東京日日新聞」大正8年1月25日、26日)という作品がある。この「菊池寛の小説」なる作品名は、「芥川龍之介全集第十二巻」(昭和53年7月24日発行、岩波書店)の「著作年表」や「作品索引」には出てこない。全集未収録作品であるかという点、そう

ではない。この「菊池寛の小説」は、菊池寛の著書「心の王国」(大正8年1月8日発行、新潮社)の跋文として書かれた作品である。すなわち、「芥川龍之介全集第二巻」に収録されている「心の王国」の跋」と同一の作品である。その全集巻末の「後記」なる解題には、この「心の王国」の跋」について、次のように記されている。

大正八年(一九一九)一月八日、新潮社発行の菊池寛著「心の王国」の巻末に「跋」として掲げられ、のち「点心」「梅・馬・鶯」に収められた。「点心」は表題を「心の王国」跋」とする。

この「後記」には「菊池寛の小説」のことが何に一つ記されていない。発表の時間からいって、「心の王国」の跋」の初出は、「東京日日新聞」に発表された「菊池寛の小説」の方であろう。

近代作家のうち、個人全集も再三再四にわたって発行され、その研究もかなり進んでいる芥川龍之介に、それも芥川龍之介と深いつながりのあった「東京日日新聞」に、逸文があったことは実に意外であった。(二月二十六日)

九月の文壇を合評す(一)

南部修太郎

菊池 寛

江口 渙

芥川龍之介

「雄弁の岩野泡鳴氏の「お常」を読んだか
い」

(読んだ。面白い、泡鳴近來の傑作ぢやない
かねえ)

「僕も読んで居て、二三ヶ所吹き出した。傑
作か何うかは疑問として愉快な作品だよ」

(僕が知つて居る限りでは、泡鳴氏の小説の
中の女の中でも、あのお常が一番よく書いて
居る)

「が、ホツテントット人の神様は、ホツテン
トット人のやうな顔をして居ると云ふが、泡
鳴氏の家へ来る女中迄が、泡鳴式なのは少し
可笑しいよ。泡鳴氏の一元描写の弊は、氏の
小説の中の人物を悉く泡鳴化するもだよ。

どの女でも、どの女でも、泡鳴氏の考へて居
るやうに色気満身なものではないだらう」

(巡查の襟衣ひらひらか何かを洗つて、風が居なくつ
て失望するところなどは、泡鳴式の書き過ぎ
で嫌だ)

「いやにリアリスチックな所が、好きなんだ
ねえ」

(最後に僕は、此作品を芸術品としてばかり
でなく、女中研究の好資料として、一般家庭
の主婦に一読を勧めたいと思つて居る)

(改造の宮地嘉六氏の「ある職工の手記」は
何うだった)

「たゞ筋書丈けだ。ある職工の手記としてな
ら満足だが、宮地嘉六氏の小説としては不満
足だ」

「佐藤春夫君ぢやないが、詩がないね、ハ、
ハ、ハ、ハ、」

(昔、田舎で職工が、現在の飛行家のやうに
珍しがられ、尊重されて居たとなど、云ふの
は面白い。が、それが話に止まつて、少し芸

術的に表現されて居ない)

「何うして、シーンを描かないだらう。面白
いシーンが沢山あるのに、それが少しも描写
されて居ない」

「外界に対しても、自分の内面に対しても、
風照が粗雑だ」

(之だけの、材料があれば、いゝ小説が書け
る。が、之はいゝ小説ではない)

「材料の濫費だねえ。此人の物は、文章世界
の「音戸の瀬戸」も読んだが、頗る呆気なか
つた。主人公が醤油屋の娘に惚れたから、何
うかなるのかと思つて居る裡に、何時の間に
か読み終つて居るのだ。此人の物では新時代
の「下駄」が、一番佳かつた。日常生活の怪
談、神秘と云つたやうな事件が、よく描けて
居る。「下駄」を頼り取られたのか何うか、
判らず仕舞になるのも可なり面白い。一寸薄
気味の悪い所がよく描けて居る」

〔「東京日日新聞」大正8年9月4日〕

九月の文壇を合評す (二)

久米 正雄
田中 純
芥川龍之介
菊池 寛

「文章世界の中戸川吉二氏の「島で逢つた画家」を読んだかい」

(読んだ。然し僕は少し失望したね。どうも原稿でいつか読んだ時の村桑な、若々しい清浄な所がなくなつて居るやうに思ふね。お婆さんに対する心持を描く処なんか、いやにネト／＼して居ると思ふね)

「饒舌に過ぎる所は、僕も同感だ。よく纏まつて居るが、何うも余りに描き過ぎる」

「それに、自分の心持や、お婆さんや馬鹿などは、よく描けて居るが、肝心の画家の性格が、描けて居ないと云ふ気がする」

(僕は、あれをありません口調に書き直したのが間違つて居ると思ふ)

「然し、君。最後にお婆さんと画家とを対照させた所はいゝだらう」

「あゝ彼処はいゝ。僕はお婆さんの心持を切り離してかいた方がよくはないかと思ふ位

だ」

「同じ雑誌の宮川曙村氏の「若い二人」と云ふのを読んだが、僕は一寸感心した。あの雑誌の今迄の懸賞小説の中では、秀れたものぢやないかと思ふ」

「一寸小品の油面を見るやうな新鮮な所があるね」

「情景も、会話も非常に自然だらう」

「新しい写生文と云ふ所があるよ」

「あゝした一寸した情景を描きながら、夫婦生活の大切な問題に触れた所に僕は感心する」

「あゝ。結末の所も一寸いゝね」

「同じ雑誌の室生犀星氏のものを読んだかい」

「一寸読み出したが止めたんだ」

「僕も実は読んで居ないのだ」

「新潮の加能作次郎氏の「追放」は何うだつた」

(一寸したものだ。が、加能君のものだから、面白いと云ふ気がする)

「僕も、平素の加能君ほどは、よくないと思ふ」

「最初に運命に対する詠嘆があり、最後にもそれが繰返されて居るから、僕は運命と云ふ

やうなものを描いたのかと思つたが、さうでもないんだね。単にあゝ云ふ事をかいたのだね。」

「あの追懐的詠嘆を、加能君はよくやるんだ。僕は「世の中へ」を讀んで居るから、この作品もその統篇として面白かつた」

「変な弁護士の書生はよく描けて居るが、奥さんの性格はボンヤリして居るね」

「同じ雑誌の舟木重信氏の「五十五階建物」は何うだらう。僕は、何うも、もつといゝものが書ける筈だと、思ふのだが」

(僕は一寸したものだと思ふ。前の「悲しき夜」などは、偽しがないが、此の作品には「偽から出た真」があると云ふね。)

「さうかね。五十五階の建物に対して、あゝした神経的な心持を感じるものかな」

(僕は、さうした心持が相当に描けて居ると思ふ)

「一寸リアルステック象徴主義と云つたやうなものがあるね。然し、余り感心は出来ない」

「『東京日日新聞』大正8年9月5日」

九月の文壇を合評す(三)

久米 正雄

田中 純

芥川龍之介

菊池 寛

「改造の谷崎精二氏の「空望」を読んだが、何うも感心しないね。ソツがなく描いてあるが、充分描けて居ないね」

「さうかね、僕は一寸感心したよ。充分描き切れて居ないとは思ふが、描いてあることは面白いぢやないか、武志と云ふ主人公の境遇も、一寸面白いし、病児の母親に対する主人公の心持も面白いと思ふよ」

「僕も、題目には同感が出るが、どうも描けて居ないと思ふ」

「僕は最後の父から来た電報を死児の胸の上に置くところなど一寸哀感的でいゝと思ふ」

「新潮の加藤武雄氏の「土の匂ひ」はいゝよ。今月の新潮で一番よくないか」

「僕は読んで居ないのだ」

「裏畑を作る老婆も、土を愛するものだ。老婆の作つた裏畑を破壊する子供達も、土を愛するものだ。而も、土を愛する者同志が、争つて居るのを、昔は土を愛したが、今は土を愛することを忘れた主人公が、その執しつれをも叱ることが出来ないで、傍観して居る所は、いゝと思ふ。おしまひの所なんか、却々いゝぜ」

「解放の久米の小説は何うだ」

「そんなに、悪くはないね」

(悪くはありませんが、いつかの「山鳥」なんかの方が、ずつといいと思ひます)

「やつぱり、少しいゝ子になり過ぎるね。Eと云ふ女優の媚態を、あゝ無条件に受け入れる所が、変だよ。もう少し、皮肉に反省的に考へてもよさうだね」

(僕もさう思ひます。自分に惚れて居たと思つて居た所。やつぱり相手の男のNに惚れて居たことが、判つてアツと云ふ筋の方が面白

いと思ひます)

「然し、久米は病後の方がよくなつたやうだね」

「それは、恐らく定評かも知れないよ」

「僕は婦人之友の「路傍」を読んで感心したよ。今迄の久米の小説で、あれほど久米が素直に出て居るものはないと思ふよ。久米の本當の姿が出て居ると思ふよ。あの調子で、此先もやつて貰ひたいと思ふ位だ」

〔「東京日日新聞」大正8年9月7日〕

九月の文壇を合評す(四)

久米 正雄

田中 純

芥川龍之介

菊池 寛

「解放の宇野浩二氏の「苦の世界」を読んだが、「大正七変人」とか「トリストラム、シヤンデイ」と、云つたやうな随筆体小説だ。面白い。近來読んだもので面白いものゝ一つだ。且つて、永井荷風氏は「冷笑」を、かいて現代の八笑人的七変人的な心持をかこうとした事があるが、宇野氏の此の小説などにこそ、ズツとさうした心持が描けて居ると思ふ」

「技巧も割合完成して居る。何時かの「蔵の中」などよりも、遙かにうまくなつて居る」
「作者は下手の長談議と断つて居るが、何うして上手の長談議だ」

「お母さんが、練兵を見て居るのを、遠くか

ら眺める所などいゝね」

「いゝけれども、彼処は本道の小説のよきだらう。此の小説の面白きを、湯屋で寝ころがつて話す所などにあるね」

「僕は、人を馬鹿にしたやうな、剽軽とも真面目とも別らないやうな詠嘆主義のある所が好きだ」

「僕は、此の小説で不満な所は、あゝした強いヒステリーの女に、何うして主人公が、あんなに惹き付けられて居るかと思ふ理由が、ちつとも描けて居ないことだ」

「その点は、僕も非常に物足らなかつた」

「僕は、あの女が主人公を惹き付ける理由は、鬨房生活にあるのぢやないかと思ふね」

「それで理由が描けないのだ」

「兎に角面白い。あの次をかいて貰ひたいと思ふね」

「中村屋湖氏の太陽の「ある婚礼」は、一通の物だと思ふ」

「「ある婚礼」と云つても、僕は可なり平凡

な婚礼だと思ふ。婚礼前の事件や、婚礼当時の事件が少しも婚礼その物に、影響して居ないと思ふ」

「僕は、あゝした事件をたゞ描いた丈ではないかと思ふ。別に作者の狙ひ所などは、ないのぢやないかと思ふ」

「それなれば、お杉に対する関係文を切り離してかいた方が遙にいゝと思ふ。何うも、作者の考へは、お杉に対する心持と後の婚礼とを、照応させて居るやうだが、僕にはその意味が判らない」

「事件文は、相当に描けて居ると思ふ」

「『東京日日新聞』大正8年9月8日」

九月の文壇を合評す(五)

芥川龍之介
菊池 寛

「大観の吉田絃二郎氏の『行く秋』はどうだ。」

「情味には同情があるが、観照の透徹してゐないのが物足りない。主人公が昔の恋人やその御亭主や二人の仲の小供に対する心もちなどを、もつと突込んで見なくちや駄目だと云ふ気がする。」

「まあそんな所だな。唯僕はあれだけでも、もつと君の所謂情味にユニークな所がある」と、いい作品になつたかも知れないと思ふがどうだ。」

「さうだね。頭か心臓か、どつちかどつと特色がありや文句がなくなるね。」

「しかし題はいゝよ。『行く秋—吉田絃二郎』と書いてあるのを見ると、読まない内からいゝ心もちがする。」

「名前と題とが調和の美を保つてゐる点から云ふと、今月の文壇に一寸類のない傑作だね。」

「閑話休題だ。今度は三田文学の松村みね子

氏の「女王の敵」へ移らう」

「実は、僕もあれを訳さうと思つたことがあるので、原作は可なり精読して居るのだ。みね子さんの訳筆は、やつぱりソツがないね」「なだらかで、流麗で、少しも読みづらい所はない」

「脚本その物は何うだ」

「或ドラマチックシチュエーションだけの面白さだと思ふ。伝奇的活動写真のフィルム最後の一部と云ふ気がする。」

「然し、僕はあゝした面白さが、戯曲本道の面白さで、思想だとか情調などの面白さは、戯曲としては邪道だと思ふのだ。さう云ふ点で、僕はある脚本は好きなんだ」

「僕も嫌ひぢやない。然しその面白さが余り手輕に出来上つてゐるので、石がなくて、食ひ足りないんだ。一体この戯曲に限らず、ダンスニイの物は悉く not bad 程度ぢやないか。」

「僕はある程度迄、ダンスニイを買つて居る。然し「山の神々」以後、あまりいゝものを書かないことも事実だ。ダンスニイ論は此位にして、宇野四郎氏の「正義派と大野」は何うだ」

「僕は前から続けて読んでゐないから、大き

な顔をして批評も出来ないが、どうもあの作中の主人公の心持と、今あの作を書いてゐる宇野氏の心持とがびつたり合つてゐないと云ふ気がする。さもなければ中学三年時代の僕より、同時代の宇野氏が遙に老熟してゐると云ふ事になるんだが。」

「然し、それはあゝした回想小説の通弊である程度迄、許さなければならぬと思ふ。僕は宇野氏が思ひの外にスツキリしたものをかいて居るので、一寸愛読して居るのだ」

「そりやさうだ。あの程度までは許せない事もないね。あれを許さないとすると、南部修太郎氏の回想小説などにも、苦情が入れられる訳だからな」

「少年時代のものを書く時に、全然少年の気持になることは至難なことだらう。やつぱり作家としての想像が、働かぬか働かないかの問題だね」

「殊に中学生のやうな、大人と子供の間中に居る人間を書きこなすのは(型に箝まらずに)困難らしいな。」

「『東京日日新聞』大正8年9月9日」

九月の文壇を合評す(六)

芥川龍之介
菊池 寛

「新小説の特殊作家号を見たが、名前が振つて居るね。作家もいろいろなのが、飛び出すね」

「この号に出てゐる作家は、皆特殊作家なのかな。どうも特殊作家など云ふと、特殊部落じみて愉快ぢやないね」

「特種と付けられないのが、セメてもの見付けものさ。」

「大杉榮氏の小説が載つて居るが、かいてある事はよくかいてあるイヤ味もなし、達者にかきこなして居る。一寸長篇の冒頭を見るやうだ。が、少しも芸術的濕^ぬほいと云つたやうなものがないね」

「存外突込んで書いてゐないのが物足りない気がする。それからかう云ふ作品を見ると、今更のやうに小説とは何かと云ふ事が考へた

くなるね。自叙伝がそのまゝ小説になるかどうか、或はもつと押し拵けて、評論でない限りの散文が皆小説と呼ばれるかどうか」

「それは、俺達がつくり考へてもいゝ大問題だ」

「僕は獄中記の方に小説の資材として、もつといゝものが沢山あつたやうに思ふ」

「伊藤燁子氏の「養父」は、捉へ所に感心した。唯書いて行くにも一種の情味にからまれて、鋭く急所を掴めなかつたのは遺憾だと思ふ。兎に角女流作家の作品としては、好いものだらう。」

「清純で素直だ。或はあの人の歌なんかよりもいゝかも知れない。堺枯川氏の「魚食人と肉食人の話」を読んだが、読み物としては頗る面白い。上司小剣氏の社会主義的小説などよりも、此人のは頭があるだけ、話が合理的で首肯させる。原始人的生活から資本家制度になる迄の経過が、寓話的に語られて居る「ウーウー」など云ふ妙な男が活躍するのも

奇抜だ。」

「芸術的小説と読み物との区別が判然しないのを奇貨として、どんなものでも小説にしてしまひ、どんな人にも小説を書かせると云ふ此頃の風潮が、文壇の混乱と衰退とを来たさずんば幸^{さいはい}だと僕は思ふ」

「あゝ云ひ忘れて居た。小山内氏の訳小説「日曜」は仲々面白いよ」

「ワルトでは眞木珉氏の「屍歩哨」が、外の同人の作品とは段違ひにうまい、まるで子供と大人とが一しよに同人雑誌を出してゐると云ふ感がある。」

「僕も同感だ眞木氏は腕があるよ」

「『東京日日新聞』大正8年9月11日」

九月の文壇を合評す（七）

芥川龍之介
菊池 寛

（中央公論の正宗氏のもの、相変らずのものだね。相変らず巧いが、人物が入り乱れすぎて、焦点がびんと来ない。民雄のよし子に對する心持は相当に分るが、その所謂「有り得べからざる」と云ふ辰子に對する心持は何時もの飄蕩なまずだ。）

「有り得べからざる」と云ふ題は、民雄の辰子に對する心持に、付けたのだらうか。僕はさうとは思はない。それかと云つて、何うしてこんな題を附けたのか判らないが。」

「民雄夫婦、村頼などといふ人物は確に相変らずの感がある。その時々々の氣持はうなづけるが全体としては、はつきり頭へ来ない。正宗氏の小説として一寸「有り得べからざる」とだ。」

「この小説の題は、イントレランスと云ふ活

動写真の名から出来たんぢやないか。」

「僕は何をかけたのか、一寸見当が付かない。正宗式の人物は活写されて居るが、何をかけたのか判らない。一寸煙にまかれたやうな氣がする。あゝ云ふものをかいて、読者を煙にまいて作者はひそかに冷笑を洩して居るのではないか。」

（芥川の「妖婆」と菊池の「順番」はオミツトすることにしよう。）

「佐藤春夫氏の「海辺の望楼にて」は、たしかに詩があるね。」

「ある。ある。僕はあの模糊とした表現には一寸感心した。かう云ふ物を書かせると、佐藤君はやつぱり第一人だね。又佐藤君の物としても、今年発表した物の中では、一番すぐれてゐるやうだ。」

「詩があるといふことには僕も同感だ。読んでみると、何となく変てこな世界へ引張り込まれる。だがあれだけでは物足りない。たゞ變な神秘的な世界へ引つ張り込ませれば、い

やそれだけで好いだらうか。僕には疑問だ。」

「僕もその点は疑問だ。又僕は佐藤氏の作品で、一番不満に思ふのは人間的興味の稀薄の点だ。尤も佐藤氏のやうな芸術至上主義の人としては仕方がないことだと思つて居るが」「がだ、それなら小説より外の形式の方が、より善く佐藤氏の表現しようとする内容に適當しはしないかと云ふ氣がする。兎に角菊池の小説などはアンチポードだ。」

「前の云ひ方は少し足りなかつたかも知れない。神秘の世界へ無理に引つ込ませるやうな点があると云へないだらうか。詩はあるが、その詩が弱い。一層のこと斯ういふ方面へ出るなら更に強烈な詩的情緒が全然人間の興味などのことを思ひ出させない程度に漂ふやうになつて来たら、その時には人生派も一言もあるまい。」

〔「東京日日新聞」大正8年9月12日〕

九月の文壇を合評す（八）

芥川龍之介

菊池 寛

「中央公論の谷崎潤一郎氏の「ある少年の佈れ」は、渾然とはして居るが、少し長すぎると思ふ。もう少し短くてもいゝと思ふ。」

「谷崎氏から文体を改めようとしたと聞いてゐるが、改められた文体は魅力が薄い憾みがある。内容は何時もより型に窺まらなくて、氏自身の将来を示唆する点から見ても、喜ばしいと思ふ。夢の一節はあらずもがなと思ふ。」

「以上二君の説に同感である。文体の凡化は惜しい気がする。然し纏つてゐて一糸乱れずと云つた書方はいゝ。」

「ゆつくり書いてある点には、僕も感心して居る。然しいつもの谷崎氏の作品に見るやうな奔放瀟灑な所が、少しなくなつたやうに思ふ。然し谷崎氏のものとしては、今年になつ

てから一番纏つたものだと思ふ。夢の場で少し説明に過ぎて居るのは感心しない。が、然し兄と弟との妙な心持の相剋はいゝと思ふ。」

「弟が夜三味線を鳴らしたので、兄が出て来る心の描写は、甚鮮明だつた。一体この頃の谷崎氏の作品は、あくどきを離れた美しさがあるやうに思ふ。僕はその点で、奔放瀟灑でなくつても、遺憾だとは思はない。」

「早稲田文学では、水守龜之助氏の「小さい葉烟」を僕は感心してよんだ。零落した老婆もよくかけて居るし、孫の老婆に対する心持もよくかけて居ると思ふ。全体としても纏つて居る。」

「僕も感心した。苦勞人の作品、老手といふ感がある。老婆も生生と描けてゐるし、孫が子供の出来たのを聞いた時の喜びなども確かに鮮かに写されてゐる。」

「「基調」の諸君が勢揃ひして出たことは愉快だ。僕は水谷君の「横顔」と吉田君の「霧の降る勢」とを讀んだ。どつちもセンチメン

タリズムに流れ過ぎてゐる所、妙に神秘的な眼で物を見ようとしてゐる所に、不滴があるが、纏まりのあるものだ。」

「然し最つと動いた心が欲しいね。」

「それは勿論だ。あれだけでおさまるのぢやあるまい。前途のある人達だ。芽生として見れば何れの作と雖も意味がある。」

「では今後に待つとしよう」

「帝國文学に畑耕一氏の「泥」が載つて居るが、帝文は此の頃僕達の所へ送つて呉れないから、一寸批評がない。」

「合評と云ふ形式を取つた為に、多くの作品を涉れなかつたことは、一寸残念だつた。九月に作品を発表された人達全体に一寸お断りをして置かう。」

〔東京日日新聞〕大正8年9月13日

新富座劇評

芥川龍之介

(上)

新富座を見た。

一番目は山崎紫紅氏作「由井正雪」三幕である。まづ大体は講釈の慶安太平記へ、宮城野忍の姉妹が師匠の正雪に惚れると云ふ一条、並に玄洞おとき兄妹の非人が世間の迫害に苦しむと云ふ一条——この生妻を二へぎ加へた煎法だと思へば間違ひない。が、新しきは唯これらの点にあつて、由井正雪自身の心理やその陰謀の解釈は、依然として黙阿弥だから、——戯曲の主題そのものに格別新しきはないのだから、あまり有難い氣のしない事は事実である。更に冷酷に批評すると、枝葉に多少の新しきがあるだけ、反つて根本の古き加減が目につく事も亦事実である。

人間らしく出来上つてゐるのはやはり宮城

野忍並びに玄洞おときの四人である。その他は主人公の正雪を始め、悉く腹の底を叩いて見たら、張扇の音のしきうな人物ばかり揃つてゐる。就中丸橋忠彌の如きは、顔のつくりこそ愛つてゐるが、あんな量見では今夜の中にも芝居がはねると赤合羽を着て二重橋界限をうろつくかも知れない。

役々では龜藏のおときの巫女姿が、到底あんな美しい女人は、慶安年間の江戸は勿論、今日の東西の棧敷にもゐまいと思はれる位であつた。それから市藏の玄洞も、市藏自身あの坊主の如く、好人物で、莫迦力があつて向う見ずちやないかと疑はれる程澆刺としてゐたやうである。最後に市之丞の正雪妾お千代は、口中に金歯を輝かせて、恐らくは如何なる江戸通も知らない徳川時代の歯科医師の奇蹟的進歩を教へてくれた。その他は秀調の宮城野、松蔭の忍など皆一通りの出来だつたらしい。唯稽古が足りないせいか、左團次の正雪、壽三郎の柴田三郎兵衛、壽美藏の忠彌の

三人が、三人とも遺憾ながら一二度台辭を間違へてゐた。

〔「東京日日新聞」大正9年6月15日〕

(下)

中幕の上は勢州阿漕浦一幕である。これも格別面白くはない。第一阿漕の平治なるものは、田村將軍の家来だと云ふのだから、義經千本櫻程度より、更に時代が朦朧としてゐる。その上母おさと女房お春実は田村息女春姫、女房お春と阿漕の平治、阿漕の平治と平瓦の治郎藏実は平治の家来中川宇内と云ふやうに、今日の我々は没交渉な、主従道徳を主とした芝居だから、一層同感し悪いのに違ひない。まづ義太夫で御馴染だから好いやうなものゝ、さもなければ一幕の間坐つてゐられるかどうかも疑問である。しかも役者は由井正雪よりも、遙に榮々やりながら、遙に又美事に成功してゐた。壽美藏の平治、龜藏のお

春、左升の庄屋など、いづれも見物大喜びである。序ながら書き添へるが、この芝居を見てゐる内に、前人未発の事を一つ発見した。と云つては大袈裟だが、実は壽美蔵が左の眉を盛にびくびく上下させると市蔵(平瓦の治郎蔵)は反対に右の眉を活躍させると云ふに過ぎない。但し二人とも両方の眉を同時に動かすのは勿論である。

中幕の下は岡本綺堂氏作「番町皿屋敷」一幕である。これは由井正雪に比べると、主題の上に一貫した新味が流れてゐるだけでも、成功の作と云はざるを得ない。或は来らんとする戯曲ではないにしても、現在あるべき戯曲たる事は疑ひを容れないやうである。左團次の青山播磨、松蔭のお菊の如き定評のある役は云ふにも及ぶまい。それより此処に云ひたいのは、荒次郎、米左衛門の二人である。彼等は二人とも或点では外の名優諸子と雖も及び難い特色を持つてゐる。その特色とは何かと云へば、この二人程西洋人じみた、非凡

な風采容貌は稀多めづにないと云ふ事である。彼等が青山の奴となつて、つくばつてゐるのを眺めた時、僕はもし僕が小山内氏だつたら、次の自由劇場にはこの二人にストリントベルグの「パリア」をやらせるがなと考へた。彼等を歌舞伎の世界にのみあらしめるのには、善く云へば彼等に氣の毒である。悪く云へば歌舞伎の世界の方も、多少は氣の毒な観があるかも知れない。

二番目は紙子仕立兩面鑑一幕である。誰でも云つてゐる通り、この芝居は悲劇の首に喜劇の胴が食附いてゐる。さうして仁左衛門がその首と胴とを、器用に繋いで見せてゐるが、芝居そのものは、悲劇も喜劇も大したものでない。お松榮三郎兄妹のモラルの如きは、殊に安価な涙さへ不可能ならしめる傾きがある。仁左衛門の助右衛門は、未だ奥い写真主義に祟られてゐる所があるとは云へ、兎に角堂には入つてゐる。秀調のお松も、一番目以来、如何なる幕の秀調より手に入つて

ゐた。左升の母妙三は無氣味である。あれはきつと夜が更けると、毛むくちやらな耳を出して、行燈の油を替めるのに違ひない。

大切の人買船は見なかつた。

〔「東京日日新聞」大正9年6月16日〕

〔付記〕

「九月の文壇を合評す(六)」に、差別的用語および間違つた認識を示すことばが使われている。無論、それらは否定されるべきものである。作品そのものが資料として歴史的価値を帯びている以上、現時点からの判断による言葉のいい換え、削除等はつつしむ、翻刻の十全を期した。それらのことは使ひや認識を是認するつもりは全くないことをお断りする。(浦西)